

# 槐

かい

関井省二創刊

令和元年11月号

令和元年十一月一日発行 第二十九巻第十一号 通巻第三四二号（毎月一回一日発行）  
平成二年九月十八日第三種郵便物認可

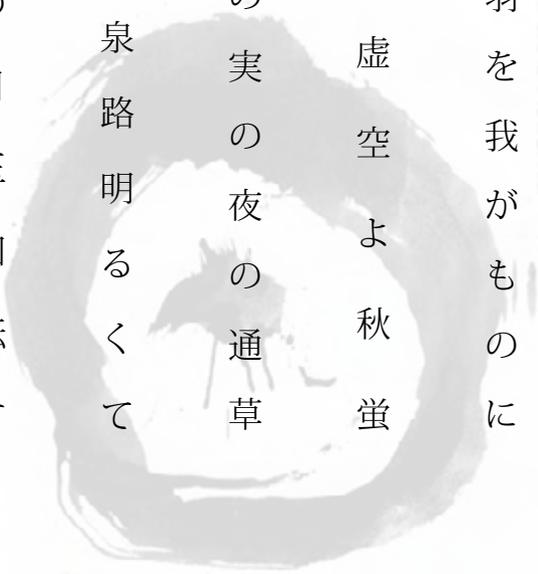


# 蜻蛉の目玉

高橋将夫

武者ねぶた総身で命輝かす  
錆鮎の命が滲み出たる錆  
ぼろぼろの鮭美しく横たはる  
懸命にそこに留まる露の玉

何枚も切手を貼って秋暑し  
何杯もおかはりする子赤まんま  
色鳥のどれか一羽を我がものに  
絶頂の果ては虚空よ秋蛍  
なめらかな純白の実の夜の通草  
鬼灯の灯れば黄泉路明るくて  
濁世みて蜻蛉の目玉回転す



# 槐安集

加藤みき

秋風やしつかり洗ふ腹の内  
海綿に吸い込まれたる晩夏光  
みどりの闇に抱かれてゐたる小鳥たち  
鞍馬山の坂 驀疾走す  
日と月と入れ変はりたり大宇宙

中島陽華

宙船<sup>そらふね</sup>や浅間岩間のひかりごけ  
知らぬといふ歳月や花茗荷  
きのふけふ郵便受けの初胡瓜  
梅天や紙啞へ見る彩<sup>いろ</sup>漆<sup>うるし</sup>  
おもかげや殊に熊野の白柳

竹内悦子

水底の世界は知らず水馬  
蜘蛛の巣や一つや二つ殺すかも  
間八の鱗とびたる渋団扇  
笑面に影の来てをる九月かな  
月天心ゆがんでゐたる水面かな

雨村敏子

涼しさの佛壇にまづ灯を点す  
眼福や大白桃に触れずゐる  
百日紅に夜のかほあり明り窓  
ぴんと張る絹糸の白夜の秋  
火祭の闇の深さよ星の森



本多俊子

改元といふ大いなる更衣  
閉ぢる目に見ゆるものあり敗戦忌  
初夏のフルートにある反射光  
やはらかく骨ののびゆく暑さかな  
火に映りしづかな心九月来る

近藤喜子

身の何か翻りたる初嵐  
明日も遊ば揺れてゐる夕芒  
星さそふ蝸に冷めゆく地熱  
時の舟さりゆく精霊流しかな  
味噌樽の踊太鼓となりけり

瀬川公馨

揺籃のリングをゆすりゆすりたる  
盆の月盗人猫をつかまえる  
つゆ草を十方浄土にもたせやる  
花オクラめかしこんだる姿かな  
かなかなの声に死嗅のありにけり

柳川晋

八月の朝が侵食されてゆく  
奈落にはブラックホール銀漢座  
老いることは怖くないよと生身霊  
お座なりと直去りの差は霧の中  
水母とて波の数ほど悩みあり

熊川 暁子

句によつて育てられたる糸瓜かな  
おとなしき金魚を掬ふ夕心  
水中花グラスに咲いてゐる孤独  
名刹の古色を洗ふ蟬しぐれ  
こほろぎの背負つて来たる弦楽器

江島 照美

誕生の秘密は秘密天の川  
祈るべき天にはあらず秋出水  
石榴の実身の内にある入れ子かな  
脚本は変はつてしまひ涼新た  
人生の俯瞰図ありや太閤忌

寺田 すす江

遠雷や地球の廻る音のして  
またひとつ夜に沈みゆく遠花火  
この上は百才までよ鱗雲  
無花果の熟れて安堵の映りかな  
悩んだり寄り道したり盆の月

岩下 芳子

指揮棒の先に生れたる赤蜻蛉  
帰省子のあの子この子へお盆玉  
天牛に噛み付かれたる腓かな  
デジタルの光つてをりし夜の秋  
迎え火や過去帳の名の懐しき

有松洋子

迎火にしやがみ風待つ君を待つ  
七夕の星よこよひは翼持て  
新涼や釘をふくみて打つ大工  
風貌はすでに劍客いぼむしり  
赤まんま痛イノ痛イノ飛ンデユケ

岩月優美子

秋嶺を仰ぎ望みを膨らます  
秋蟬や振り絞りたるラブソング  
いつ来ても母のふところ大花野  
山霧や先は地獄か天国か  
椰子の実の着きし岬の花カンナ

近藤紀子

おおかみになんで螢がついてるの  
青柚子をもらひにベルを鳴らしけり  
恐竜が出さうな昏き秋の昼  
おき忘れし子の狐面ににらまれし  
赤い月「つひに北を指す針」を擱く

有本俱子著「前田鈍孝伝記」

竹中一花

灯に人声寄りし風祭  
江戸小紋の袖に梶の葉しまひけり  
秋茜朝の紅雲背に負うて  
太郎坊やとんばう湖を越えて来る  
玄鳥去る風の中なる大鳥居

前田美恵子

夏木立光と影を分かちをり  
蒲の穂やかかつてなにはの台所  
濁り酒故人の話聞く夜かな  
秋扇おくれ毛をかき上げにけり  
息遣ひ今も残りし盆の月

中田禎子

いなづまの探してゐたる山の神  
古びたる御魂は神に盆用意  
白鳩やオリーブの実のたわわなる  
奪衣姿や大河をはさみ二つ星  
晩節のつややかなりし秋の朝

吉田順子

天界に色の通へる曼珠沙華  
赤とんぼ群れ夕空の動かざる  
夕空は雲のまんだら秋の蟬  
蓮の実の飛んで太古の池の中  
月光や父ありし日の笙の音



# 槐市集

阿部さちよ

不条理を越えなつぞらの若葉風  
ひとり覚め命ひとつと夏の月  
涼しさを招きいれたり独り聞  
暮れを待つ若き妻の背揚花火  
耐え難き辛苦む知らず終戦忌

出利葉孝

点々と墨飛び散りし蟻の群れ  
半グレが肩で風切る夏猛る  
逆光の黒い立像晩夏かな  
指の間をすると抜けて処暑が行く  
広島忌御霊の滴星しぐれ

井上静子

緊張のあとの安堵や汗しとど  
子の頭上即かず離れず秋の蝶  
鮎の背にやさしき色の蓼酢かな  
もう少しと頁をめくる夜の秋  
ネックレスをはずす男の玉の汗

今井充子

夏休み子等の歓声遠ざかり  
目に浸むる汗搔きの顔玉の汗  
鈍色の梅雨空支ふ畝傍山  
自然生え地を這ひ木の上南瓜花  
青紫蘇の諸手一杯摘みにけり



岩田洋子

ワイルドに生きてをりけり蝸牛  
目つむれば花野なりけり破れ靴  
炎昼やゴールキーパーの横つ飛び  
撫で肩の大和の山や秋の雲  
大夕焼己が影を耕せり

植木戴子

秋日和花見小路の絵画展  
浮き雲や水族館のミズクラゲ  
高架下の水耕栽培秋暑し  
非常用袋見直す大暑かな  
藍染めの絹の扇子や佛の間

大塚たきよ

大勝や帰校の列に晩夏光  
口裂けしも言へぬことある石榴かな  
八一<sup>イ</sup>九<sup>ク</sup>の日の省二の句集鯛の鯛  
秋扇箆筥にしまふ香ほのか  
深夜便聞いてをりけり熱帯夜

岡田桃子

餓鬼の田の謂れ哀しき弥陀ヶ原  
紅差指を掲ぐ高原吾亦紅  
高みへと尾の無き蜥蜴消えにけり  
万国旗オール励ます風は秋  
夕焼の水面に水輪また水輪

荻布貢

いまどきのチンと音する温め酒  
越中の水清らかや源義忌  
宿題やひらきなをりて夏祭  
悪酔の虎に変身猿酒  
平成に続く令和や敗戦忌

山田佳子

影動く屏風祭の二階かな  
更衣妣の衣着て妣笑まふ  
薔薇園の薔薇まだらなりビルの群  
まなうらの母はエプロン麦こがし  
桂林の奇峰奇岩や大滴り

# 槐集

## 高橋将夫選

置去りにされし足跡処暑の浜  
大阪 出利葉 孝

大夕立町はすつぽり雨の檻

鬼灯は死者のはにかむ色香らし

むしむしと背中は汗のグラウンド

空洞に処暑が落込み腕きをり

人生の夏は短かしソーダ水

月光を独り占めせり夜のプール

芭蕉虚子をひもとく日々や明易し

ざくろ割れ異界の扉開きけり

新しき朝をひらけり牽牛花

嘯んで飲む郷の名水岩清水

船鉾は碎氷船のごとく行き

影でしか残らぬ倅原爆忌

弥陀佛に拝まれてゐる生御霊

風死すや緩む蓮の香いとほしき

藤田美耶子

平野 多聞

幼子の魂も門火もぎこちなく  
守口 三木 亨

冷静に過去を否定す新豆腐

少年の反抗しづむ星月夜

尼寺にをんなの声す稲光

走馬灯とほき記憶の空まはり

今朝の秋真白き皿にあふれける  
枚方 阪倉 孝子

白桃や齡はんなり重ねたき

湯びき鱧素顔のくらし楽しくて

クレーンに釣り上げられる残暑かな

青野行く果てにありしは月の舟

鳥居から本殿までの夏の距離  
守口 中西 厚子

病葉に一筋の陽の当たりをる

炎暑の日銀歯の人の尋ね来る

夕立雲の行方占ふキーパーソン

山車を引く男の腕に西日照る

# 銀河往来

## ◆槐集観照

空洞に処暑が落込み腕きをり

出利葉 孝

処暑は新暦八月二十三日頃で暑さも納まる意。ところが、尚も暑さが続いている。その暑さに私はもがいている感じだが、作者によれば、処暑ももがいているという。空洞に落ちて。

〈置去りにされし足跡処暑の浜〉の句は残された足跡を「置去りにされた足跡」と詠む。〈大夕立町はずつぽり雨の濫〉の句の「雨の濫」、〈鬼灯は死者のはにかむ色香らし〉の「はにかむ色香」、〈むしむしと背中は汗のグラウンド〉の句の「汗のグラウンド」、どれもこの作者ならではの表現で、しかもなるほどと腑に落ちる。

人生の夏は短かしソーダ水

藤田美耶子

確かに人生の夏は短い。それに「ソーダ水」を配したところが手柄。泡のようにすぐに消えるのだ。

〈月光を独り占めせり夜のプール〉は人で込み合う昼のプールとの対比が鮮やか。〈新しき朝をひらけり牽牛花〉の句は爽やかな夏の朝にふさわしい。牽牛花は朝顔。

弥陀佛に拜まれてゐる生御魂

平野 多聞

「弥陀佛に拜まれてゐる」は単に「佛を拜む」を逆にしただけではなく、悪人正機説のような深い意味をもつのだろう。実際、合掌した仏像に見られてもいる。

〈船鉾は砕氷船のごとく行き〉の句は人波の中を行く船鉾から氷の中を行く砕氷船への飛躍が見事。

幼子の魂も門火もぎこちなく

三木 亨

祖霊を迎えるために焚く門火。迎える方も迎えられる方も所作がぎこちないという。幼くして亡くなった子への思いが伝わってくる。

〈冷静に過去を否定す新豆腐〉は四角い「新豆腐」の新しさ、やわらかさが意味深長。〈走馬灯とほき記憶の空まはり〉の句、確かに走馬灯も記憶も空回り。

青野行く果てにありしは月の舟

阪倉 孝子

青野の果てに三日月が見える景。まるでその果てから舟に乗って月に行けそう。

〈白桃や齢はんなり重ねたき〉、〈湯びき鱧素顔のくらし楽しんで〉からは作者の素直な心情が伝わってくる。

鳥居から本殿までの夏の距離

中西 厚子

「夏の距離」の表現が新鮮。普段ならそんなに遠く感じない距離も暑さの中だと長く感じられる。これが夏の距離感。

〈病葉に一筋の陽の当たりをる〉の句、病葉にとって「陽の当たる」が救い。〈炎暑の日銀歯の人の尋ね来る〉の銀歯の人はどんな人。金歯の人より不気味かもしれない。

秋の蝶時追ふやうに急ぎをり

柴田 靖子

なぜそんなに急ぐのか。でも、急がないと冬が来る。

〈子規の忌のあまくて苦き故郷かな〉は故郷の本質、俳句の本質に迫る。〈以下略〉